

DN GL

災害看護 Disaster Nursing Global Leader Degree Program

グローバルリーダー養成プログラム

NEWS LETTER

VOL.5

4月2018

C
O
N
T
E
N
T
S

- Message from the Program Director, DNGL External Evaluation Meeting in 2017・・・ 2
- Enrolled Student Voice・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- Message from teachers, Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN)・・・ 8



「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」は、我が国初の国公立5大学院からなる共同大学院です。

Message

プログラム責任者からのメッセージ

近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震の可能性、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなど未曾有なものへの対策も急務であり、その為には、国際力、学際力を備えたイノベティブな人材育成が必要です。そこでこれまで災害看護学を牽引してきた高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の国公私立の5大学院が一丸となり、人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、国際的・学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組んでいます。

皆様方には、本プログラムの災害看護教育・研究の活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

プログラム責任者 高知県立大学 南 裕子



2017年度 DNGL 外部評価会

DNGLプログラムにとって2回目となる2017年度の外部評価会を、12月18日(月)に日本赤十字看護大学にて開催しました。外部評価者は、前回の外部評価会で委員長をお務めいただいた、米国ラトガー大学のWilliam L. Holzemer博士です。また、この評価会では、本プログラムのオフィサーである中部大学の那須民江先生にもご参加を賜りました。

評価会は、責任大学・高知県立大学長の挨拶の後、プログラム責任者とプログラムコーディネーターから、前回の外部評価会で提示された課題とその対策、そしてこれまでの活動が説明されました。

その後、各大学から1名の学生が、DNGLでの学びに関して英語でプレゼンテーションをしました。Holzemer先生からは、前回の評価で指摘したRecommendationに丁寧に対応しており、全体として非常に成功しているプログラムであると評価をいただきました。また、学生のプレゼンテーションに関しては、言葉を尽くして褒めていただきました。



東京メトロ御茶ノ水駅での 合同テロ災害訓練への参加

2018年2月7日、東京医科歯科大学構内で実施された本郷消防署主催の合同救助救急訓練に、DNGLの学生17名(東京医科歯科9名、千葉5名、日赤3名)が参加しました。

この訓練は、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向け多数傷病者発生時の対応能力向上を目的として実施され、消防団、東京メトロ丸の内線御茶ノ水駅、東京医科歯科大学および東京DMATが参加しました。「何者かが地下鉄ホームで液体とスプレーを大量散布し、多数の要救助者と傷病者が発生」という想定で、学生は傷病者および避難者として参加し、救助の要請、トリアージ、医療処置、除染などを受けました。

学生は「傷病者」の立場を経験したことで救助者側とは異なる不安や困難を理解でき、また消防や救急の対応を間近で見学したことにより、災害時の連携の在り方を考える貴重な機会となりました。



WHO健康開発総合研究センター (WHO神戸センター)でのインターンシップ

2017年11月から4ヶ月間、WHO 神戸センターでインターンシップをさせていただきました。神戸センターは、WHOジュネーブ本部直轄のグローバル・リサーチセンターです。日本国内をはじめ、海外のアカデミアとも共同研究をしています。インターンシップでは、研究がどのように現在および将来の健康課題にアプローチし、得たエビデンスを政策につなぎ、人々の健康やよりよい生活に寄与しているのかを学びました。さらに、私は研究アシスタントとして災害時の要配慮者に関連した文献レビューを行いました。



スーパーバイザーの茅野医官にキーワードの選定、文献やガイドラインから読みとれる課題等、グローバルヘルスや医学の視点から温かくご指導をいただきました。また、研究者の俯瞰的な知識の深さと広さを感じ、社会における研究者の役割や意義ならびにWHOの役割への理解を深めました。

地元の中学校と連携した減災活動

地元の中学校と高知県立大学のDNGLが連携し、中学生による防災・減災活動を行っています。1学期から話し合いを重ね、生徒の学びたい!という要望に応え、夏休みに3つのワークショップを行いました。1回目は、行政の地域防災推進課の方に、熊本地震の支援の経験やそこから高知県が学ぶべきことを講演いただき、避難所での生活や問題についてグループワークをしました。2回目は、日本赤十字社高知県支部のご協力のもと、心肺蘇生法と応急処置法の演習をしました。そして、3回目は、様々な人の集まる避難所ですべてのようように声掛けをすれば良いのかをロールプレイを通して体験し、最後に学びのまとめをしました。行政、赤十字、福祉事業所など、地元の様々な機関が協力してお互いに学びあうことができ、人と団体との繋がりができていくことを経験したことは、災害看護学を学ぶ者にとっても貴重な機会となりました。



ジュネーブ国連・国際機関研修に参加して

2017年9月25日から3日間、スイス・ジュネーブ国連・国際機関研修にDNGL学生2名で参加しました。

WHO(世界保健機関)やThe Global Fund(世界エイズ・結核・マラリア対策基金)、ILO(国際労働機関)、IFRC(国際赤十字・赤心月社連盟)、在ジュネーブ日本政府代表部を訪問し、施設内を見学するとともに、各機関で働く職員の方々と率直にお話する機会を得ました。

職員の方々から組織の使命や具体的な活動について伺い、さらに、日本人が海外で働く困難さや対策、各機関で働くために必要な能力やキャリア形成の過程について貴重なお話を聞くことができました。

グローバルな課題に挑み、日本や世界の人々のために働くことは、やりがいがあると同時に大変なプレッシャーがあると想像されますが、世界の人々が安全・安心に暮らすための努力を続けることが大切だとわかりました。



Glen Edward 客員教授との研究ゼミ

2017年12月13日に日本赤十字看護大学において、本学の1~4年生7名がGlen Edward客員教授と指導教員との研究ゼミを行いました。私は博士論文の計画書を作成している途中で、先行研究を含め今までの学びを統合し、何を探究するのか、研究目的の焦点化に苦悩していました。Glen Edward先生に、何を実現するために研究しているのか明確なビジョンを持つことが大切であるご指導いただき、それがとても胸に響きました。また、学生一人一人が探究している現象についてグローバルな視点からはどのように見えるのかをディスカッションし、現象への理解がより深まったと感じています。博士論文を作成する中で悩んだり、迷ったりすることは無駄ではないことを示唆してくださり、前向きに取り組む自信に繋がりました。



高知県立大学 University of Kochi



河村 木綿子

2011年の東日本大震災により、生まれ故郷である福島も被災地となりました。その翌年から福島県相双地区で地域の方々のこころと身体のため活動しました。「被災した地元のために何かしたい」、という思いだけで従事している自分自身の姿勢に疑問を持ったこと、また、2011年以降も幾度となく世界では災害や紛争が起きていることにも関心があり、このプログラムへの入学を決意しました。福島から高知へ渡り、国内に在住しながらも多様な文化に触れ、看護の分野だけにとどまることなく多くのことを学べていることに感謝しています。世界を広げ、知識を深め、いつか福島や世界中の人々のこころと身体を健やかにできるよう、努めていきたいと思えます。



Yudi Ariesta Chandra

Assalamualaikum. Hello. Salam kenal.
 I am Chandra from Indonesia. Mental health and family resilience issues on disaster are my interest topics. It is a great opportunity to study on DNGL program. This program, through lectures on the class, field practicums, and various development activities provided in among 5 cooperative universities, is fostering me to become a future global nurse leader who can respond and solve a wide range of problems in disasters, and perform interdisciplinary leadership skill. Also, learning with students with various experiences and come from different countries such as Japan, Nepal, and China as prone disaster countries on Asia-Pacific region, gives me a wonderful learning process to share and understand every topic of lectures on global perspective. With various knowledge and leadership skill that I will get from this program, I hope I could establish a career in education and research on disaster nursing particularly on family and mental health, and contribute in enhancing health policy, nationally and internationally, to strengthen community resilience. Thus, DNGL program is highly appropriate way to achieve my personal and professional goals as a Nurse Leader.



Sushila Paudel

After Nepal earthquake 2015, working in one of projects with Dr. Sakiko Kanbara as Principal investigator from University of Kochi broadened my view of disaster nursing. By April 2016, the successful result of the study working with nurses in disaster risk reduction overwhelmed me and surprisingly many people began looking forward to see the sustainability. My interest for research got strengthened, then I questioned whether I was meant for this work, as disaster nursing competencies are grossly inadequate in Nepal. Thus I challenged myself being the first nurse in Nepal to gain degree in specialized Disaster Nursing Global Leader course. Various curricular and non-curricular activities of DNGL program along with love, respect and kindness ingrained in Japanese culture with my teachers, friends, international students and incredible opportunities provided to foster multisectoral coordination in disaster nursing have helped me to gain more competencies and confidence within. Most importantly, as a long-term goal, I want to see myself beneficially contributing to global health challenges applying my skills and expertise in field of disaster nursing to promote human security.

千葉大学 Chiba University



佐藤 真奈美

助産師と看護師の経験、ウズベキスタンでのボランティア活動、デンマークで暮らした経験、様々な人との縁で災害看護学を学んでみようと思ひDNGLに在籍しています。所属大学だけでなく、他大学の先生方の授業に参加することができ、授業、課題、研究と学生生活は大変ですが、学ぶ喜び、新しいことを知る・気づく喜びは代えがたい財産となっています。

災害看護の分野のグローバルリーダーとして、看護する対象者の利益を第一に考えた多職種連携とリーダーシップがとれるよう、専門職としてのスキルと知識だけでなく、経験を積み重ねながら、一步一步自分の目標に近づけるよう日々取り組んでいます。

兵庫県立大学 University of Hyogo



胡 沁 (Hu Qin)

As a nurse comes from Sichuan Province of China, I experienced two major earthquakes in the past. These experiences make me deeply aware of the sufferings caused by the disaster. Japan has rich experience in disaster nursing. The DNGL program brings the best Japanese disaster nursing experts together. It is not only a huge resource for disaster nursing discipline, but also for other health related subjects. I am honored to be one of them, and I believe it will be an unforgettable experience in my life. I hope to make a due contribution to disaster nursing as a Chinese nurse someday in the future.



陶 冶 (Tao Ye)

I'm Tao Ye from Sichuan, China. As an emergency nurse from western China where suffered from frequent disasters, I find it is important to seeking for further education in the disaster nursing leading countries especially Japan. To join in the DNGL degree program is such a precious opportunity for me. DNGL degree program provides me the opportunity to listen to experts from different aspects in disaster health management and to exchange opinions with classmates from different countries. It helps me to build the global perspective of disaster nursing and stimulates me to explore disaster nursing both academically and practically. What's more, the advanced facilitates and innovative distance learning method really broadened my horizons. Moreover, as a foreign student I can always feel the warm welcome while studying here. I received kindly assistances from senior students and all the teachers. Studying in DNGL program is interesting and challenging. I really cherish the chance to learn in DNGL program.

日本赤十字看護大学 Japanese Red Cross College of Nursing



荒井 千瑛

私は東日本大震災後、当時期間困難区域であった福島県沿岸部に入り強い衝撃を受けました。瓦礫がそのまま残り、震災から時間が止まったような、人が生活していない街の様子を見て、災害看護を深く学びたいという思いからDNGLに入学しました。大学院では、実践豊富な講師陣からの講義や演習を受け、大変刺激的な毎日を送っています。学会や研修への参加や、福島第一原子力発電所事故による被災地や、熊本地震被災地でのインターンシップ活動を経験し、幅広い視点で災害看護を学ぶ機会を得ています。充実した学修環境に身を置けることに感謝すると同時に、今後は研究にも力を注ぎ、被災者の苦痛が軽減できるように多角的な視点で事象を捉えられる人材になれるよう、学友と切磋琢磨していきます。



周東 美奈子

病院勤務が長かった私にとって、大学院での生活や学びは自分自身の新たな強みや弱みを知る発見の連続でした。弱みのほうが圧倒的に多く時に落ち込みますが、その分、多様な力を持たれている人々がとても多いことに気づくことができました。弱みは「新たな伸びしろである」と声をかけてくれた学友達と自身の成長を楽しみにし、日々学業に励んでいます。講義や演習では医療や災害だけでなく多岐にわたる分野の学問に接し、自分の価値観や、看護を広げる機会となっています。また、英語でのディスカッションやポスター発表、多くの被災地へのフィールドワークなど私にとってすべてが新しいことへの挑戦です。その刺激や自分の力不足を痛感することが私の学びの原動力です。

東京医科歯科大学

Tokyo Medical and Dental University



小曾根 京子

このプログラムは看護学に留まらず、他の近接学問の専門家から多角的な講義が提供されていることが魅力だと感じたため入学を決めました。実際に入学してみて、充実した講義と研究課題に対する丁寧な指導のおかげで、少しずつ視野が広がってきています。TV会議システムを通し、様々なバックグラウンドの同級生とディスカッションする機会が多く、多様な価値観のもとに災害看護を追求しています。また、先輩からの指導や課外活動への参加も実践的な学びにつながっています。このような素晴らしい環境で学習できることに感謝しています。



鴨田 玲子

看護師の道を選択したのは、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件での医療対応に関心を持ったのがきっかけです。多様な経験が災害サイクル各期での柔軟な看護実践に役立つと考え、国内外の医療機関での入院・外来業務や医療搬送、予防医療など複数の職場で勤務しました。人生の中で衝撃的な出来事に遭遇してもその人らしく生きていくための支援を、と常々考え看護実践しておりましたが、東日本大震災を契機に今後の看護師人生を探っていた時、災害を多彩な視点で学び、看護実践を考えるDNGLプログラムを知り入学を決意しました。5大学に出身・国籍・経験が異なる学生がおり、講義でのディスカッションで新たな視点を獲得するのもDNGLの特徴です。バラエティに富んでいる先生や先輩方からも指導や刺激を受けながら、災害時だけでなくどんな時でも、そして世界中どんな場所でも、人々が健康で笑顔でいられる一助になる研究を行いたいと考えています。

世界看護科学学会 (WANS)

世界看護科学学会(WANS)が、2017年10月20-22日にタイのバンコクで開催されました。高知県立大学のDNGLからは、佐々木が“Literature Review on the Roles of Disaster Medical Assistance Team Nurses”をポスターセッションで、Hastoroが“Male Involvement in Sexually Transmitted Infections (STIs) Prevention After the 2010 Merapi Eruption in Indonesia”を口頭で、それぞれ発表しました。

この国際学会では、災害看護だけではなく看護の現状と動向について、そして世界の健康についても学ぶことができました。また、研究計画を次のステップに進展させるために、世界の健康と政策に関して意見交換をすることができました。特に、グローバルな健康問題と政策、そして健康に関する多様なそして新しい情報について、効果的に吸収することができました。災害看護のグローバルリーダーとして、知識を広げ、意見を共有し、議論し、他の分野とのネットワークをグローバルな視点で確立することの必要を強く感じました。



研究への取り組み

As the 2nd year student I was expected to do research field activity. Firstly, I still haven't any idea yet about the research theme, but then I found that the tsunami 2004 increasing Indonesia government's attention for community disaster mental health issue. Government realized that PHN is suitable to deliver early psychosocial intervention because PHN works closely with the community. Thus, in 2005 Indonesia PHN started to provide disaster mental care. But, it is hard to find previous literatures that wrote about the experience of Indonesia PHN in disaster. Then, I decided to do a descriptive qualitative study about the experience of Indonesia PHN in disaster mental care. I went to the western tip of Java Island, a remote and rural area, interviewing PHNs of 2 Public Health Center from October to November 2017. Doing study about the PHN brought me to better understand the importance of PHN role in disaster.



学術的な取り組み

私はDNGLに入学する前までは、災害看護は災害急性期の健康問題に取り組むものというイメージを抱いていました。しかしDNGLで学ぶうちに視野が広がり、特に実践課題レポートでは復興期の人々にインタビューを行ったことで、災害は発生後長期間に渡って人々の健康と生活に大きな影響を与え続けること、および災害看護も発災後長期にわたって被災した人々に貢献する分野なのだ実感しました。現在はさらに視点を広げ、備えをしておくことで災害から命と健康を守ることも看護の役割の一つであると考えようになり、特に高齢者が自らの能力を生かして備えを実践するための研究に取り組んでいます。



東京YWCAでの災害対応準備支援活動

東京医科歯科大学の近隣に位置する東京YWCAは、首都直下地震等の際に「高齢者および女性と子どもの一時避難所」として千代田区の指定を受け、備蓄や避難場所確保などの対策を実施しています。2017年7月4日に、東京YWCA職員を対象とした「大規模災害時の避難所における衛生と安全」研修として、講義と演習を実施しました。

教員による、予想される災害状況や避難所で発生し得る心身と傷病と対応、衛生対策の講義のあと、約20名のYWCA職員が4グループに分かれ、DNGL学生がファシリテーターとなって「避難中の女性の、男性の家族が来た場合の対応」「食物アレルギーのある子どもと周囲への対応」について、グループワークを行いました。参加者からは、「対応が難しいが、十分あり得ること」等の感想が聞かれ、対策を考えてもらうきっかけづくりとなりました。



EAFONSに参加して

2018年1月11-12日に韓国ソウルで開催されたEAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars)に参加しました。EAFONSは東アジアの看護系大学院生、若手研究者を対象とする国際フォーラムであり、教育内容の強化と情報の共有を目指し、各国の看護学の発展を促進していくことを目的としています。

日本赤十字看護大学では、毎年1年生がEAFONSでのポスター発表を行っており、今回も1年生2名がポスター発表を行いました。ポスター発表だけでなく、様々な国の研究者のポスターを見学し、研究結果をどのようにポスターに表現するか、研究で明らかになったことを明確にすることの重要性を学びました。

今後も国際学会に積極的に参加し、海外からの知見を得ると同時に、日本の災害看護を世界に発信できるような人材になるために、学友と切磋琢磨していきたいです。



教員からのメッセージ



Message

私のDNGLのチャレンジはこう始まった

2011年3月11日(金)の夕方は、博士後期課程の授業をしていました。同僚が、東北地方で大変なことになっていると、教室まで知らせてくれました。直ぐにインターネットで情報を収集しようとしたのですが、未だ十分な情報がありません。そこで、学内でTVを探してスイッチを入れました。詳細は不明でしたが、とにかく大地震と大津波により未曾有の災害が発生しているのは確認できました。手が震えたのをよく覚えています。当時、私は日本災害看護学会の理事長を拝命しており、学会の先遣隊を出動させねばと担当理事に電話を掛けました。しかし、被災地から離れている高知から担当理事がいた広島にも電話が繋がりません。改めて災害の大きさを感じました。地元の水害がきっかけで、災害看護の世界に入りましたが、私のDNGLのチャレンジは、この東日本大震災の経験が契機となっています。



高知県立大学教授
山田 覚

さらなる成長を期待して

DNGLも開講から5年目を迎え、最上級生はいよいよ最終年となりました。学生は、授業だけでなく、被災地での支援活動やインターンシップなどのさまざまな課外活動、そして研究活動と非常に忙しい日々を送っています。毎日接していると変化には気づきにくいものですが、プログラムの中間評価などの機会に改めて学びの成果を聞くと、着実に成長していることを実感します。兵庫県立大学では、地域住民等への防災教育や県・市など自治体と連携した活動を、年間を通じて実施しており、看護の視点から地域コミュニティの防災力強化を検討する機会となっています。また、WHOなどの国際機関と連携した活動にも取り組んでいます。ローカルかつグローバルな視点から災害看護を考え行動できるリーダーとして、さらに成長していくことを期待し、これからも学生と共にさまざまな活動に取り組んでいきたいと思っています。



兵庫県立大学教授
増野 園恵

HEDN について

世界初、 災害看護国際学術雑誌HEDNスタートし5年が経ちました!

看護職は災害の現場において、発災直後から復興に向け、あらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、幅広く活動してきました。そこで災害看護の知を集積し世界へ発信するために世界初の災害看護国際学術雑誌Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN) を立ち上げ、すでに5年が経ちました。HEDNはオンラインをベースとしたジャーナルで、投稿、掲載料は無料です。

災害看護の知を結集し、リアルタイムの情報を発信するため、教員、研究者、臨床家、学生、活動家など、様々な場で尽力する方々の原稿を募集します。

詳細は <http://hedn.jp/>

